

ピアチュータリングを取り入れた高等教育における統合型学習支援システムの開発

Development of an integrated learning support system with peer tutoring for higher education

美馬 のゆり*

鈴木 克明**

椿本 弥生*

Noyuri MIMA*

Katsuaki SUZUKI**

Mio TSUBAKIMOTO*

渡辺 雄貴***

根本 淳子**

大塚 裕子*

Yuki WATANABE***

Junko NEMOTO**

Hiroko OTSUKA*

公立はこだて未来大学*

熊本大学**

首都大学東京***

Future University Hakodate* Kumamoto University** Tokyo Metropolitan University***

〈あらまし〉 本研究の目的は、近年我が国の高等教育で課題となっている新入生の導入教育、リテラシー教育、リベラル・アーツ教育、キャリア教育などのカリキュラム、ファカルティ・デベロップメントなどの活動を、学内で現在行われている学習支援活動を組織化しつつ、より効果のある、統合型学習支援のシステムを開発することである。そのために、国内外の調査を実施し、その結果を受け、学習センターの活動で中核となる、学生が学生を教えるピアチュータリングに注目した。学習空間を整備しつつ、チューター研修およびチュータリング実践を行い、それを支援するための e ポートフォリオシステムを開発した。その結果、ポートフォリオシステムの運用における課題とともに、学習支援活動の振り返りを含めたチューター育成研修カリキュラムの必要性などが明らかになった。

〈キーワード〉 学習支援 ピアチュータリング 高等教育 支援システム メタ学習

1. はじめに

本研究の目的は、近年我が国の高等教育で課題となっている新入生の導入教育、リテラシー教育、リベラル・アーツ教育、キャリア教育などのカリキュラム、ファカルティ・デベロップメントなどの活動を、学内で現在行われている学習支援活動を組織化しつつ、より効果のある、統合型学習支援のシステムを開発することである。ここで開発するシステムとは、eラーニングなど ICT を利用したプログラムだけでなく、大学が全学的に導入する学習支援制度やそのための人材育成までを含む。

そのために、認知過程に注目したメタ学習（学習法の学習）、学生のピアチュータリング、eラーニングによる高度専門職業人等の育成など、本研究チームのこれまでの研究および実践の知見を活かしていく。チューター育成研修カリキュラムの基準づくりとその認定制度の構築も視野に入れ、我が国独自の教育・学習方法として、全国の大学や大学院に展開可能なモデルを提供する。

本稿では、これまで行ってきた調査結果、チュータリング実践、開発した e ポートフォリオシステムとその運用、および今後の予定について述べる。

2. 国内外の調査

国内外の先進事例および現状調査を、関連する国際学会や、それら学会において評価の高かった米国および国内の大学について実施した。調査の際、組織的に教育改善を行っている学習センターやラーニングコモンズなどの授業外の学習支援活動に着目した。

そこで明らかになったのは、CRLA (College Reading & Learning Association) の存在である。CRLA はその前身から数えると 40 年以上の歴史ある学会であり、チューターの質を高める制度として各大学が行っている研修が一定の要件を満たしていることを証明する認定制度 (ITPC: <http://www.crla.net/itpc/>) を設けている。

CRLA の認定では、ガイドラインに沿った事前研修だけでなく、チュータリングの見学、メンターによるモニタリングと評価・改善指導など、様々な角度から、チューターとしての職務を果たせる準備をし、また実際に果たしていることを確認する仕組みが要求される (鈴木・美馬・山内, 2011)。

事前研修の内容は多岐にわたる。たとえば、認定機関の一つテキサス A&M 大学の学生学習センターでは、差別とハラスメント、倫理、詐欺・

損傷・迷惑行為の報告についてのeラーニングモジュールを学習することから始まり、新任チューターには、倫理、チュータリングの定義と責任範囲、チュータリング基本ガイドライン、チュータリングでやるべきことと禁止事項、問題解決のモデリング、積極的傾聴と言い換えについて、丸一日かけて討議中心で学んでいく。さらに継続者も交えて、スタディスキル、成人学習・学習理論・学習スタイル、レファレンススキル、目標設定と計画についてさらに一日かけて学ぶ研修が毎学期行われている。

調査した大学の共通点として、まず支援活動の実績を積み、徐々にそれが学内で認められ、施設を拡充してきていたことや、学生支援活動を担う教職員が、授業を担当する教員と伍して自らの専門性を訪問者である我々に語ったことである。そのような態度や姿勢が、充実した支援活動を支え、また活動の一端を担う学生に良い影響を与えていると考えられる(鈴木, 2012)。

3. ピアチュータリング実践と空間

上述の調査結果とその考察を受け、学習センターの活動で中核となる、学生が学生を教えるピアチュータリングに注目し、A大学で試みた(椿本ほか, 2012)。

学生を中心とした学習支援組織とそのための空間である「メタ学習ラボ (MLL: Meta Learning Lab)」を構築し、メタ学習(学習方法の学習)を目的としたピアチュータリング活動を行った。チューターは、学部1年生から修士1年生までが存在した。チュータリングは1セッションを60分とし、実施した科目は、数学、英語、プログラミングなどであった。

活動の準備として、チューター育成研修や学習空間を設計した。A大学は5階建ての校舎全体が巨大なラーニングコモンズとなっている。MLLは、中でもスタジオと呼ばれる学生が自由に利用できる場所の一角に設置した(図1)。したがってMLLの活動は、スタジオを通りかかる学生や教職員に見えるようになっている。

チュータリング実践の結果として、学習者には、チュータリングによる自らの学習方法へのメタ認知の促進効果や、学習意欲の向上効果が得られる可能性が示唆された。



図1 MLLの学習空間

3.1. チューター育成研修

チューター育成研修では、チュータリングの意味や意義、技法、背景理論などを確認するため、ワークショップ形式で、ロールプレイングなどの技法を用いたチューティ対応演習や、チュータリングで用いるドキュメントの作成などを行った。前述のとおり、CRLAの認定も視野に入れ、CRLAで研修として実施されている、チューターがやるべきことと禁止事項についての分類も実施した。その中では、分類内容に関する議論だけでなく、項目自体について、一部入れ替えるべきではないかといった考えや、やるべきか否かは一概に判断できないといった深い考察に基づく意見が出された。

この活動終了後、質問紙調査を行ったところ、チューター活動の核となる知識や技法の一部を習得したことが明らかになった。またそれらの不足分について、さらに習得するためのレディネスが各チューター内に形成されたと考えられる結果が得られた。CRLAの先行事例を参考としたチューター研修によって、学習方略の学習を目的としたチュータリング方法やその意義をチューターに学ばせることが可能となった。

3.2. 学習支援空間

本実践の中で、学習支援活動を「見せる」ことの効果があることが明らかになった。

2011年11月28日に、チュータリングを実施していたところ、MLLが設置されているスタジオを通りかかった学生Aが、MLLの活動を見た。チューティとこの学生は同じ授業を履修する友人同士であり、チューティはその授業の課題についてチュータリングを受けていた。学生Aは友人であるチューティに「何してるの?」と声をかけ、チュータリングを受けていることを知ると、「私もその課題分からなかったの」と言い2人目のチューティとしてチュータリングに途中から

本システムの特徴は以下の2つの機能にある。

(1) 「日誌」コンテンツ

日誌を書くことによって、内省のプロセスを蓄積し、思考や学びを整理することができる。各チューターの日誌は、「日誌」エリアと「フィードバック」エリアがあり、参加者全員が見ることができる。これらが記録として蓄積されていく。

(2) チュータリング・リフレクションページ

チューターがチュータリング活動の振り返りを行なうことと、チューター間でチュータリングのノウハウを共有するために必要な項目を考え、チュータリング・リフレクションページを作成した。各チューターが作成したページは、本実践の参加者全員が見ることができる。リフレクションページの項目は以下の通りである。

- (1) チューティの基本情報
- (2) 相談内容 授業科目・具体的な相談内容
- (3) 対応方法
- (4) ノート・板書
- (5) 振り返りシート
- (6) チューティについての振り返り
- (7) チューターとしての振り返り
- (8) 今日の気づき
- (9) 連絡・相談

本実践では、学生チューターによる学習支援組織である MLL において、チューターのための eポートフォリオを作成し、活用した。その結果、チューター間でのやりとりを活性化させるために、チューターが疑問に思ったことや、簡単な挨拶等をコメントし、それらに対し、フィードバックを積極的に投稿することを促す仕組みが必要であることが明らかになった。

また、eポートフォリオで振り返った内容について、さらにメタ的な視点から振り返りを行う研修カリキュラムが、チューター育成に必要であることが示された。

5. 今後の予定

本研究では、収集した資料および知見を分析、整理するとともに、我が国の実情、実践研究大学に合わせ、各プログラムの開発、およびそれらを統合した学習支援システム構築のための検討を行ってきた。その一環として、ピアチュータリングの実践研究を行ってきており、そのための eポートフォリオシステムを開発した。今後は、これ

らの研究成果を活かし、他大学で行えるよう、パッケージ化し、実践研究を行うとともに、チューター育成のための研修カリキュラム開発を行うことを計画している。開発するプログラムの全体像は図4のとおりである。さらには、国内におけるチューター育成研修カリキュラムの普及と、育成研修プログラムの認定制度の確立も視野に入れ、研究を行っていく。

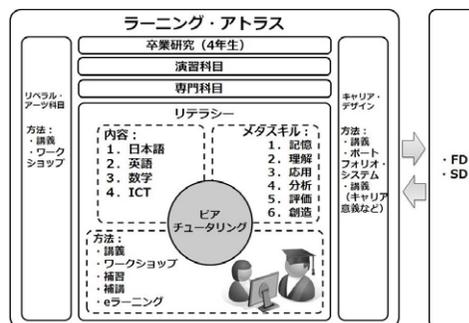


図4 ピアチュータリングを取り入れた統合型学習支援システム

参考文献

- 鈴木克明 (2012) 大学における教育方法の改善・開発[総説]. 日本教育工学会論文誌, 36(3), pp. 171-179.
- 鈴木克明・美馬のゆり・山内祐平 (2011) 大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか. 日本教育工学会研究報告集, 11(1), pp.81-186.
- 椿本弥生・大塚裕子・高橋理沙・美馬のゆり (2012) 大学生を中心とした持続可能な学習支援組織の構築とピア・チュータリング実践. 日本教育工学会論文誌, 36(3), pp. 313-325.
- 横山真衣・椿本弥生 (2012) 学習センター「メタ学習ラボ」における eポートフォリオ活用実践. 日本教育工学会研究報告集, 12(5), pp.17-24.

謝辞

本稿は、科学研究費(基盤B)「ピアチュータリングを取り入れた高等教育における統合型学習支援システムの開発」(研究代表者:美馬のゆり, 課題番号:24300287)の支援を受けている。